

喫茶店の大衆化過程における学生の利用状況

——昭和初期の学生に関する記述を手掛かりに——

山中 雅 大

1. はじめに

明治以降、日本が近代化を迎えると、生活様式や教育、そして食生活は「西洋化」の影響を受け、人々のそれまでのライフスタイルを大きく変化させた。特に、日本におけるコーヒーの受容は、コーヒーを提供する場の「店」と「都市」の変容、そしてコーヒーを嗜好し「店」や店が栄える「盛り場」を利用する「インテリ層」の多様化と増加が、重要な役割を担った。コーヒーの受容過程において、江戸期から栄えた「茶屋（茶売り、茶店）」の外食文化から明治期に「喫茶店」や「カフェー」を生んだ一方で、それら日本に新しく登場した飲食文化の場の利用状況には、同じく明治期の近代化によって生まれた「学生」の存在があった。

全入学時代の現代だからこそ、我々は戦前の高等教育機関に在籍する数少ない「学生」に対し、なお一層「エリート学生」という認識は強い。ことさらに、戦前期のコーヒー需要のピークは1930年代であり、社会的には戦時下体制の中日常生活や娯楽が厳格化される頃であったため、「お国のため」といった「禁欲的で忠心的な学生像」が連想される。しかし、その間における、コーヒーの飲用文化には「サボ学生」や「不良学生」と呼ばれていた、高等教育機関に在学する数少ない「エリート学生」たちの利用があった。

本稿は、2章で「お茶を飲む」という習慣が日常化され、それらがいかにコーヒーの飲用習慣に継承されていったのかを概観した上で、「喫茶店」がどのような誕生と多様化を迎えたのかをおさえる。そして、3章で明治期の近代国家形成により生まれた高等教育機関と、それに伴う「学生」が昭和初期までにどのような変遷過程を歩んだのかを取り扱った上で、昭和初期頃の「学生」の「喫茶店」および「カフェー」の利用状況について、当時の新聞記事と、4章における昭和初期時に「学生」であった青年の日記の記述を手掛かりに検証する。なお、昭和初期の学生の日記については、大森（2011）の先行研究と原資料を参考にする。

2. 「お茶を飲む」習慣と場の変遷——伝播から昭和30年代まで——

日本における茶やコーヒーの飲用習慣は、古来より大衆にとって日常的に嗜まれていたも

のではない。石毛（1996）は、明確な境界線を引くのは難しいとしながらも、「それぞれの民族の価値観に根差した個別性の強い事象を文化とし、個別的な文化の違いをのりこえて、普遍的にひろがる事象を文明として（p.186）」とらえた上で、比較した際に文化としての性格が強い場合を「文化の飲みもの」、文明としての性格が強いものを「文明の飲みもの」と区別した。そして、日本の緑茶は「文化の飲みもの」となっているが、導入時は中国から伝播した「文明の飲みもの」で、歴史経過の中で変容し、作り方、飲み方が日本化したことで「文化の飲みもの」になったと述べている（石毛前掲）。

コーヒーもまた、他国から「文明の飲みもの」として伝播し、導入され、普及し、やがて大衆の日常生活の中に習慣化されていったと言える。ここでは、茶やコーヒーにおける「お茶を飲む」という今日でこそ習慣化された行為が、いつ、いかなる人々や場所の変容によって導入と普及を迎え、日常化されたのかについて取り上げる。

2-1 日本における茶とコーヒーの伝播

日本の茶は、平安初期に留学僧が中国から種子を持ち帰ったことに由来する¹⁾。留学僧によって持ち込まれた種子は、各寺を中心に栽培されるようになり、やがて鎌倉時代後半の禅僧たちが抹茶による喫茶の風習を、武士、貴族、庶民へと普及させていった（江原ら 2009）。

しかし、石毛（前掲）によれば、「江戸時代に抹茶にとってかわった茶葉の飲用がなされるようになって以来、茶は日常的な場面であるケの飲料として定着（p.187）」したとされ、江戸時代以降茶の飲用が非日常的行為（ハレ）から日常的行為（ケ）になったと述べている²⁾。また、石毛（前掲）は「酒は祭りの飲料として日本の神々にささげられたのに対して、仏前に献茶する、茶が不祝儀の贈り物にされる風習の地方があるなど、どちらかといえば仏教に結合した飲料としてのイメージが茶につきまといっている（p.187）」と分析し、日本文化における茶と酒には対立があることを示した（図1）。

一方、コーヒーは、江戸幕府による鎖国時代の17世紀半ばに、長崎出島のオランダ商館から伝えられたとされている。伝播時、コーヒーを飲用した日本人はごく少数に限られており、長崎奉行所の役人や通詞といった「インテリ層」と遊女のみであった（高井 2009, 高田 1996）。しかし、「こうした人たちでも、“異国の味・コーヒー”は受け入れられなかった（高井 2009 前掲, p.91）」。

酒＝酩酊＝ハレ＝神＝辛党＝男性的
↑ ↓ ↑ ↓ ↑ ↓ ↑ ↓ ↑ ↓ ↑ ↓
茶＝覚醒＝ケ＝仏＝甘党＝女性的

出典：熊倉功夫・石毛直道編集（1996）『日本の食・100年〈のむ〉』ドメス出版 p.187

図1 日本文化における酒と茶の対立

コーヒーが、一般の目に触れるようになるのは、黒船が来航し江戸末期に開国がなされ、長崎、横浜、函館などが相次いで開港されることにより、開港地を中心に外国人居留者が増え、彼らのためにコーヒー豆が運び込まれるようになったことによる

(広瀬ら 2007)。そして、開国により日本の開港地を中心に日本人による西洋料理店が次々と開店し、店のメニューの一部としてコーヒーが提供されたことや、開国と同時に使節や視察、そして留学の目的で欧米に日本人が渡航することによって、コーヒーの飲用の習慣が日本人の身につき始めたとされている(高井 2009 前掲, 広瀬ら前掲)。しかし、「一般の目に触れるようになった」と言っても、まだまだ「インテリ層」たちの飲用の習慣に留まっていたに過ぎず、コーヒーの飲用が大衆化するのには第二次大戦以降のことであった³⁾。

江戸時代に入り茶が日常的行為として大衆に習慣化されるようになる一方、コーヒーは江戸末期に伝播し、「インテリ層」を中心に飲用が始まった。コーヒーの飲用の機会と場の増加には、江戸時代に栄えた外食店と、明治期における「西洋化」の流れが影響したと考えられる。そして、茶による「お茶を飲む」という行為が江戸期に日常的習慣となったことは、江戸末期から明治期にかけて日本人がコーヒーによる「お茶を飲む」という行為を徐々に導入していったことに繋がったと考えられる。

2-2 茶を飲む場の変遷——茶店の変容と外食店の増加——

茶による「お茶を飲む場」の変遷は、前述したように禅宗の僧侶たちの茶の湯の形式—これが後に千利休によって完成する懷石料理である—から始まり、室町時代に僧侶たちが各寺で「一服一銭」⁴⁾として茶を売り始めた「茶屋」に端を欲する(江原ら前掲)。その後、江戸時代の江戸や京、そして大坂など往来人の多い地域で「茶屋(茶売り、茶店とも言った)」は茶と菓子を提供する休憩所として発展し、やがて料理、惣菜、芝居、相撲、あるいは遊女を紹介する風俗や、貸座席を兼ねるような場など、多種多様なものやサービスを提供する営業形態に拡充していった(江原ら前掲)。特に江戸期には参勤交代制による人口の流入—単身赴任の武士や、江戸に出稼ぎにくる労働者などの男性の往来が激しかった—のために、飲食をする場であった茶屋が江戸で大きな発展を遂げ、簡易的な食べ物を提供する屋台から高級料理屋、その他飲食店のみに限らず多種多様に栄えた。

つまり、江戸期に発展した茶屋により茶は飲む場を増やし、そして、自宅でも飲める飲料となったことで日常化(ケ化)し、茶は上流階級の一部が嗜む「文明の飲みもの」から大衆が日常的に飲む「文化の飲みもの」になった。

コーヒーを提供する場については、前述したように幕末の外国人居留地における西洋料理店からであった。しかし、幕末から登場していた西洋料理店であったが、前坊(2000)によれば各地域で西洋料理店が開店し、増加し始めるのは1877年(明治10)以降になってからだと考えられている。つまり、コーヒーが「文明の飲みもの」として周知されるようになるのは、「西洋化」が推進される明治時代からだということである。

2-3 明治の「文明開化」以降における「喫茶店」

黎明期

明治時代になると、福沢諭吉の「文明開化」という言葉が流行する。日本政府は殖産興業や富国強兵、そして脱亜入欧を推進していく中で、「西洋化」を進めた。特に食生活においては、欧米諸国に負けない体を作るべく、肉食の習慣が解禁となり、牛鍋やとんかつが生まれ、「洋食」といった「西洋風」の料理が登場するに至り、和洋折衷の料理や様式が急速に増える。そして「喫茶店」の誕生も同じく、明治期の和洋折衷における西洋化の流れで生まれた⁵⁾。

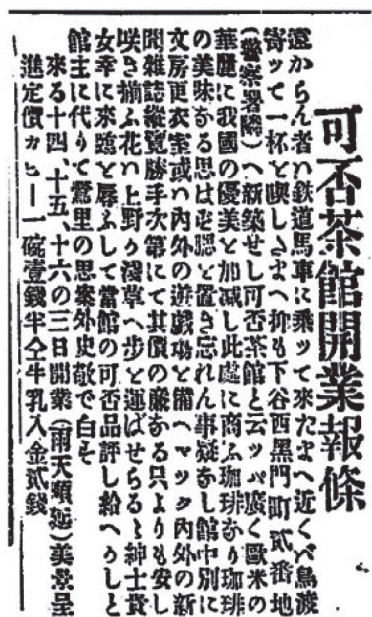
伊藤 (2001) によれば、明治になり「西洋化」の兆しが見られたからと言って、コーヒーの新しい動向にすぐに結びつかなかった。伊藤 (前掲) によれば、1877年 (明治10年) 以前は、「コーヒーの消費量から推測して、主に外国特使、使臣、来賓、高級官吏の接待用か、国内の特権階級またはごく少数のハイカラ族の域を出なかつた (p.193)」と述べている。

コーヒー飲用の場は、幕末の開国により外国人居留地の西洋料理店から始まったが、日本人経営者による日本最初の「喫茶店」は、鄭永慶⁶⁾ によって1888年 (明治21年) に東京・下谷西黒門町 (現在の台東区上野) で開店した「可否茶館」だと言われている (高井2014)⁷⁾。図2は、その「可否茶館」の開店に伴い、『読売新聞』に掲載された広告である。記事の内容は以下の通りである。

可否茶館開業報條

遠からん者は鉄道馬車に乗ツて来たまへ近くば鳥渡〔ちょっと〕寄ツて一杯を喫したまへ抑も〔そもそも〕下谷西黒門町貳番地 (警察署隣) へ新築せし可否茶館と云ツパ〔と言うは〕広く欧米の華麗に我國の優美を加減し此處に商ふ珈琲なり珈琲の美味なる思はず鯉を置き忘れん事疑なし館中別に文房更衣室或は内外の遊戯場を備へマツタ〔又〕内外の新聞雑誌縦覧勝手次第にて其価の廉なる只よりも安し咲き揃ふ花は上野か浅草へ歩を運ばせらるる紳士貴女幸に來臨を辱ふして當館の可否品評し給へかしと館主に代りて鶯里の思案外史敬で白す〔申す〕

来る十四、十五、十六の三日開業 (雨天順延) 美景呈進定価カヒ一 碗壹錢半同牛乳入金貳錢⁸⁾



出典：読売新聞「可否茶館開業報條」
1888年4月13日 朝刊

図2 「可否茶館開業」広告

経営者の鄭は「コーヒーを飲みながら知識を吸収し、文化交流する場（高井 2014 前掲 p.26）」とすべく「可否茶館」を開店させた。その理由の背景には、「可否茶館」をコーヒー・ハウス⁹⁾のような公共空間にする狙いがあった。そのために、「可否茶館」を「インテリ層」の集会の場として利用させていたようである。特に注目すべきは、その「インテリ層」の利用として、帝国大学の「学生」の利用があったということだ¹⁰⁾。また、「可否茶館」の店内には、トランプやクリケット、ビリヤード、囲碁や将棋などの娯楽品が置かれ、そのほかに国内外の新聞、書籍を揃え、更衣室や湯殿まで備えていた（高井 2014 前掲）。

「可否茶館」のコーヒーと牛乳の値段は、開業広告からも分かるように、それぞれ1銭5厘と2銭であった。高井（2014 前掲）は『明治・大正家庭史年表』の記述から当時の練りハミガキが2〜3銭であったことや、東京の牛肉の値段が1斤でヒレが30銭、ロースが24銭であったことを例に、「可否茶館」で提供されているコーヒーや牛乳は庶民の手に届く価格であったと述べている。しかし、伊藤（前掲）は当時の常連の一人であった高橋大華翁が「可否茶館」について語った記述から、「学生」にとっては一杯の茶に1銭5厘を支払うのは高価で、何も飲まずにビリヤードだけ行っていたという状況でもあったことを示している¹¹⁾。そして、「可否茶館」は赤字経営や火災、鄭の借金や後妻との死別による苦悩により、1892年（明治25年）に閉店した。

明治末期から大正にかけて、「西洋化」は益々促進される。江原ら（前掲）によれば、大正時代には「三大洋食」として、コロッケ、カツレツ、カレーライスが庶民の間で大流行して、洋食店やカフェなどで提供された（p.236）。コーヒーや洋食を提供する場として、洋食店や「喫茶店」が徐々に増加し始め、そして「カフェ」が誕生した。

「可否茶館」が明治初期に普及させることができなかつた日本における「喫茶店」は、「可否茶館」が閉店してか

コーヒー店開業 カフェパウリスタ

●本店は十二月十二日より世界のコーヒー本場生粋の南米ブラジルコーヒーを發賣す
 コツプ一杯賣より半斤一斤の小賣一袋以上の知賣も華客の御需に應ぐ
 (南米ブラジル國サンパウロ州政府專囑珈琲發賣所)

●本店はブラジル國サンパウロ州政府保護の下に毎年本邦需要のコーヒー全額を輸
 入す自今此佳香美味雙絶の生粋コーヒーは全國あらゆる西洋食料品店にて發賣す
 (京橋區南鍋町二ノ一三 電話新橋二六七五)

出典：読売新聞「コーヒー店開業
 カフェパウリスタ」1911
 年12月12日 朝刊

図3 「カフェパウリスタ
 開業」広告



出典：日本近代史研究会（1952）『画報近代百年史第十集』国際文化情報社
資料提供：東京経済大学長谷川倫子教授

図4 「カフェー・ライオン」における女給の接客（1911年当時）

ら20年ほど経った1911年（明治44年）の銀座に登場した「カフェー」によって全国に普及することとなった¹²⁾。「喫茶店」を日本全国に普及させることとなったのは、1911年（昭和44年）12月に創業した「カフェーパウリスタ」のによるものだと言われている。銀座店移転開業当時、『読売新聞』に掲載された広告が図3である。図3の記事からも分かるように、「カフェーパウリスタ」¹³⁾はブラジルのサンパウロ州政府からコーヒー豆の継続的供与を受けていた。そして、東洋における販売権を受け、大正期半ばには全国の主要都市に店舗を揃え、銀座店では一日に4000杯のコーヒーが飲まれ、名古屋店では一日6000人が来客した程だったという（長谷川2008）。日本においてテレビ放送もラジオ放送もない時代に、「カフェーパウリスタ」は時事通信社前に店舗を構え、周囲には朝日新聞社、帝国ホテル、電通本社や外国商館があったことが功を奏し、文化人や外国人が利用し、また「学生」や社会人の出入りも多かった（高井2009前掲、長谷川前掲）。

「日本初のカフェ」は1911年（昭和44年）4月に開店した「カフェー・プランタン」だと言われており、高井（2009前掲）によれば、芸術家や文豪、役者、そしてジャーナリストなどの文化人が集い語り合う「知識階級のサロン（社交場）」として人気を博したそうである。しかし、「カフェー・プランタン」は経営を維持するために、常連客から維持会員を募る日本初の会員制カフェであり、閉鎖的な面があったと考えられる。

「カフェー・プランタン」、 「カフェーパウリスタ」と同じ年の8月に開業した「カフェー・ライオン」は、他の2店とは異なりメニューの中心を洋酒と洋食にした（高井2009前掲）。そして、何十人もの和服にエプロンを身にまとった女性（女給）を雇い、時にお客の話し相手をさせた（高井2009前掲）。それまでも、「茶屋」や「喫茶店」、「カフェー」に女給を雇用することはあったが、「風俗的な」接客業態を行う女給の先駆けは、「カフェー・ライオン」（図4）からであったと考えられ、この営業形態が後に「喫茶店」や「カフェー」を、「普通飲食店」と「特殊飲食店」に分けることになり、1933年（昭和8年）の「特殊飲食店取締規則」という取り締まりから、警察による「学生狩り」が執り行われることに繋がった。

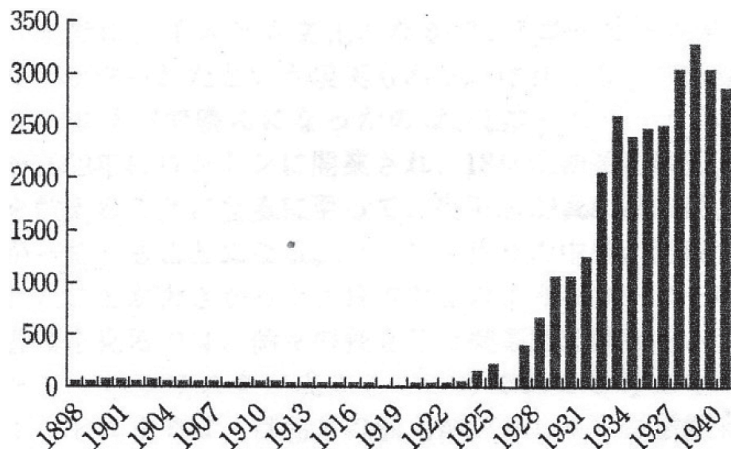
明治時代以降の「文明開化」以後における、衣食住の生活様式の「西洋化」により、「喫

茶店」や「カフェー」が登場することで、コーヒーは文化人や「学生」、社会人などの「インテリ層」により、ようやく「文明の飲みもの」として周知されることとなった。

2-4 昭和初期の「喫茶店」の増加と多様化に伴う規制

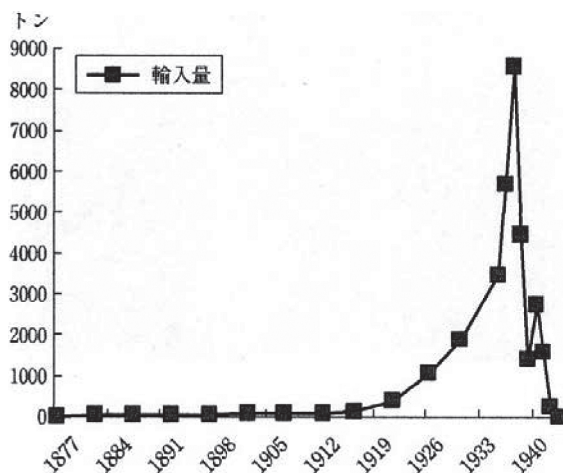
明治末期から大正期に増加し始めた「喫茶店」は、1923年（大正12年）の関東大震災以降に急増する。1898年（明治31年）から1940年（昭和15年）までの「喫茶店」の店舗数は『東京市統計年表』のデータで知ることができる。東京旧市部に営業していた「喫茶店」の数は1898年（明治31年）が69店、1923年（大正12年）が55店と横ばいであったが、その後急激に増加し、1924年（大正13年）には159店となり、1929年（昭和4年）には1000店を超え、1938年（昭和13年）には3307店と店舗数が最大になった（図5）。しかし、『東京市統計年表』による喫茶店の店舗数の経年変化については「喫茶店」と「カフェー」の区別が曖昧であったことや、1923年（大正12年）まで「カフェー」が「喫茶店」に含まれていなかったという批判もあり、店舗数の推移のデータは正確さを欠く¹⁴⁾。だが、「喫茶店」が関東大震災以降に急増し始めたことは確かなようだ。

また、コーヒーの飲用習慣が増えたことは、コーヒーの生豆輸入量の増加からも見て取れる。伊藤（前掲）によれば、明治時代には年間100トン未満だった輸入量が、大正期に3桁まで増加し、1914年（大正3年）に103トン、1926年（大正15年）には1057トンに増加し、1934年（昭和9年）には2922トンまで増加する。そして、1937年（昭和12年）を境に急激に輸入量は下降する。1938年（昭和13年）に「国家総動員法」が施行されることにより、戦時体制の強化の影響で、コーヒーの輸入に規制が掛かり始めたためである。これら



出典：坂井素思（2007）「コーヒー消費と日本人の嗜好趣味」, 放送大学『放送大学研究年報』第25号

図5 東京における「喫茶店」の店舗数（1898～1940年）



出典：坂井（前掲）より

図6 日本全体のコーヒー生豆輸入量

コーヒー生豆の輸入動向を坂井（2007）が通関統計からグラフ化したものが図6である¹⁵⁾。

大正時代から昭和初期にかけてコーヒーの消費拡大をもたらした要因について、伊藤（前掲）は、「カフェパウリスタ」が料理よりもコーヒーをメインに提供する「喫茶店（カフェ）」として全国主要都市に支店を開設したことにより大衆のコーヒー文化が広まり、それにともない「カフェパウリスタ」以降、街中にコーヒーに比重を置いた店やレストラン、ホテルが次々に出現したことを挙げている。店の具体的な例が、学生街に多かった「ミルクホール」¹⁶⁾ や、「カフェ」¹⁷⁾ の増加、そして「純喫茶」¹⁸⁾ の登場による多様化であり、コーヒーの飲用の日常的習慣化と飲用の増加を促した。だが、1933年（昭和8年）2月に「特殊飲食店営業取締規則」が発令されることによって、「喫茶店」は「普通飲食店（純喫茶）」と、「特殊飲食店（風俗営業）」とに形の上で二分し、取締りの対象となる。規制が発令される頃の、東京の「盛り場」であった銀座の様子は、当時の雑誌ではないが以下の雑誌内容からも伺える。

「銀座の通りは出盛りの時刻で、浮気な色が街全体に漂っていた。男はみんなギヤングみたいな顔つきを作り、気取って歩き、女は誰も彼も売春婦風の洋装をつけ、色濃くメークアップしていた」（武田麟太郎「銀座八丁目」より）。五色のネオンが夜空にかがやく。銀座会館やクロネコなどのカフェやキャバレー・ダンスホールが表通りにたちならび、裏通りに小じんまりしたバーや社交喫茶が客を呼ぶ。夜中の一時を過ぎかんばんになった後は、裏通りの屋台が一しきりよつばらいでにぎわい、流しの円タクがするすると近寄つて来る。こうした光景が「非常時」の足音が不気味にしるのびよつてきたころの銀座である。

一九三三年（昭和八年）はカフェーの全盛期で新聞の広告欄は連日女給募集の広告で満されていた。この年八月ビクターが売り出した「東京音頭」（西条八十作詞・中山晋平作曲）はものすごくヒットした。このメロディーに乗って民衆は踊り狂った。つゞく「さくら音頭」等々戦争前夜にいたる狂燥曲は昭和の“ええじゃないか”とさえ呼ばれる。¹⁹⁾

上記の記事の内容は、1952年（昭和27年）に日本近代史研究会によって発刊された『画報近代百年史 第十三集』内での記述であるため、必ずしも当時を反映したものとは言えないが、「喫茶店」、「カフェー」の状況のみならず、戦前の銀座という「盛り場」における大衆の娯楽状況が分かる資料である。「盛り場」となった「カフェー」の「学生」による利用を、警察は過度に取締り検挙し始め、「学生狩り」とまで称される騒動となった。昭和初期の「学生」の「喫茶店」利用については3章に後述する。

3. 昭和初期における「学生」の生活状況

「喫茶店」や「カフェー」の登場、普及する過程の中、「学生」がいかにして誕生し、増加したのかについてここでは抑えておきたい。そして、「学生」の増加の変遷を踏まえた上で、当時の「学生」の生活や娯楽状況と、「学生」による「カフェー」利用の取締り（「学生狩り」）の状況を、当時の新聞記事から明らかにする。

3-1 明治期から昭和初期における高等教育機関数と在学者数の推移

明治時代において近代国家を形成するための高等教育機関の誕生もまた、「西洋化」の流れによって形成された。1872年（明治5年）に発令された「学制」²⁰⁾は、「仏国学制」を基本としながらオランダやドイツ、アメリカなどの制度を参考に制定された（天野2009）。

大学の誕生は、「学制」によって小学・中学・大学の学校制度の単純化がなされ、1877年（明治10年）の「東京大学」の設立からであった。その後、「東京大学」は1886年（明治19年）に当時の文部大臣であった森有礼によって「インペリアル」の訳語としての「帝国」という名がつく「帝国大学」へと変化していった（天野前掲）。また天野（前掲）は、「帝国」という名には、帝国大学の設計を担った初代総理大臣の伊藤博文と森有礼による、「国家官僚の養成を中心に国家に奉仕する大学（天野前掲，p.8）」という目論見があり、日本の大学と高等教育機関システムの将来を決定づけるに重要で、政治的な選択が隠されていたという。1918年（大正7年）に公布される「大学令」によって、帝国大学以外の官公私立大学の設置が正式に認可されるまで、1877年（明治10年）から約40年、東京には帝国大学以外に大学は存在しなかった²¹⁾。

その間、法律学校、医学校、語学学校などの学校が官立を含め種々設置されたため、政府

は1903年（明治36年）に「専門学校令」を公布した。これによって、中学校卒業もしくは修業年4限年以上の高等女学校卒業者を入学資格として、修業年限3年以上の「高等ノ学術芸ヲ教授スル学校ハ専門学校トス」と定め、帝国大学以外の官立、公立、私立の学校が大学に準ずる高等教育機関となった。その後、こうして専門学校として位置づけられた学校が、「大学令」によって大学へ昇格した。昇格した私立学校は、慶應義塾大学、早稲田大学、法政大学、明治大学、中央大学、日本大学、國學院大学、同志社大学であった。その後も大学への昇格を果たした専門学校は増え、大正年間だけでも総計22大学が昇格を認可された。明治期から昭和における高等教育機関²²⁾の機関数の推移は表1の通りである。

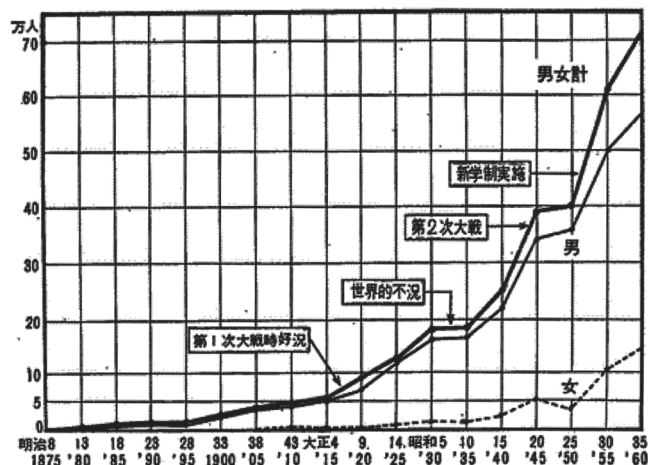
高等教育機関の増加や新たな認可に伴い、「学生」の数も増える。だが、前述したように、「大学令」が施行されるまで「大学生」と呼ばれる存在は帝国大学生のみに限られるごく少数であった。竹内（2011）は旧制高等学校を經由した帝国大学卒業生が正系学歴貴族であると指摘し、「エリート」にも本流と傍流があると述べている。竹内（前掲）によれば、戦前の学歴には三つの断層があり、一つは尋常小学校卒や高等小学校卒などの「庶民」と、中等学校卒業生である地方の「中堅」やインテリとの断層である。二つ目にはその「中堅」層と専門学校や大学などの高等教育卒業生との断層である。三つめが、専門学校や私立大学者などの傍流のエリートと帝国大学卒業生の本流エリートとの断層である²³⁾。

高等教育機関の在学者数は、明治30年代に増加傾向がみられるが、これは日清・日露戦争時の工業の発達が、専門的な教育を受けた人材を要請し、「専門学校令」（1903年）に整備され、専門学校が増加したことによる。工業生産力の拡大により、高等教育卒業生の需要が増加し、国民一般の所得増加など、進学の経済的基礎ができたことによる、大正末期から学校の増設に伴い、高等教育機関への在学者数が急増した。昭和初期の不況時には在学者数が伸びなやむものの、1935年（昭和10年）以降は戦時下の生産力拡充にこたえて、在学者数が急増した（図7）。文部科学省は明治から昭和初期にかけての高等教育機関の在学者の割合と、鉱業生産の指数および国民所得の伸びの比率で示している（表2）。1935年（昭和10年）時、約20万人存在していた高等教育機関在学者数であるが、表2が示すように該当年齢人口比率では3.0%のみであり、当時の日本人の総人口は約6925万4千人にのぼり、その内の生産年齢（15～64歳）人口は約4048万4千人であったことから²⁴⁾、高等教育機関の教育を受けるものは多くなかったと推測できる。竹内（前掲）が示すように、エリート学生に「本流」と「傍流」があるのだとしても、戦前の学生はまだ「学生さん」と呼ばれる対象として希少だったと考えられる。

表 1 高等教育機関数

年 度	計	国立	公立	私立
明治 28 年 (1895)	63 校	16 校	3 校	44 校
38 (1905)	84	39	4	14
大正 4 (1915)	108	45	7	56
14 (1925)	257	106	50	101
昭和 10 (1935)	308	104	61	143
25 (1950) ⁽¹⁾	829	250	131	448
35 (1960)	525	99	72	354
37 (1962)	565	100	74	391

(注) (1) 昭和 25 年は旧制度と新制度の学校が重なっている。



出典：文部科学省「日本の成長と教育」(昭和 37 年度) [第 2 章 2 (5)] http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad196201/hpad196201_2_014.html#tb1.11
(閲覧日時：2015 年 6 月 10 日)

図 7 高等教育機関在学者数の推移

表 2 高等教育機関在学者数の該当者年齢人口に占める比率
(経済指標と対比して)

年 度	高等教育在学者の割合 ⁽¹⁾	鉱工業生産指数 ⁽²⁾	国民所得の伸び ⁽²⁾
明治 28 年 (1895)	0.3%	3.0	20.1
38 (1905)	0.9	6.8	23.1
大正 4 (1915)	1.0	16.5	37.0
14 (1925)	2.5	62.8	60.7
昭和 10 (1935)	3.0	100.0	100.0
25 (1950)	6.2	96.8	93.3
35 (1960)	10.2	476.9	225.8
36 (1961)	10.2	577.1	266.9

(注) (1) 大学院在学者を含めた。
該当年齢人口は各年度により範囲を異にする。

(2) 昭和 10 年 = 100

出典：文部科学省「日本の成長と教育」(昭和 37 年度) [第 2 章 2 (5)] http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad196201/hpad196201_2_014.html#tb1.11
(閲覧日時：2015 年 6 月 10 日)

3-2 大正末期の「学生」の生活と娯楽

大正末期の「学生（帝国大学の学生）」の生活状況を知る資料として、『東京朝日新聞』の1926年（大正15年）2月14日の新聞記事がある（図8）。記事によると、1925年（大正14年）の冬に帝国大学の友会共済部という団体が、帝国大学の全学生（6252名）に対してアンケート調査を行ったもので、回答数が2302票だった。

調査内容には、通学にあたっての住まい、家賃・研究費・書物代・小遣いなどの支出、宿泊先での賄代、読む本の種類、そして日常における娯楽についてであった。記事の内容をもとに、支出額と、各科における研究費の内訳を表にまとめた（表3）。下宿者や間借に住んでいる「学生」の支出は割合的に高くなってしまいが、全体的に平均して一月60円の支出となっている。記事によれば、当時の下宿代は一畳あたり市内が2円51銭で市外は2円3銭であることが「学生」たちの調査から分かった。また、市内の下宿先の賄料金は二食が21円54銭で、三食の場合は24円41銭、市外の場合は二食が19円80銭で、三食の場合は22円59銭であった。

小遣いは、寄宿舎から通学する「学生」の一人が2円と最低で、借家の学生の100円、下宿者の95円が最高であった。娯楽については、「圍棋（記事の解読困難）、観劇が一番多いこと、し好は大體煙草、菓子、酒、果物の順序なこと」とある。また、記事の最後には「次男以下を加へて長男の数に及ばぬ程惣額の甚六が優待されていることなど」とあり、兄弟に格差があり、「学生」の場合でも長男の場合はさらに優遇措置があったということが分かる。伊藤（前掲）によれば、1926～1930年（昭和1～5年）のコーヒーの値段は10銭²⁶⁾であったようだ。賄の飯が一日75～80銭ほどすることを鑑みれば、「学生」でも当時十分に「喫茶店」を利用することができたと考えられる。

また、1930年（昭和5年）の『東京朝日新聞』にも、「学生昨今」という記事で、「学生」の娯楽が分かる（図9）。記事によれば、1930年（昭和5年）の神田一帯は私立大学が建ち並ぶ学生街となっており、「喫茶店」や「カフェー」が午前9時から営業していたようだ。学校では一時限の時刻であるが、「ペンを走らせる学生は、全学生の約半分、後の半分は喫茶大学、カフェー大学院に登校し、しかし毎日のことだからコーヒー一杯で一時間を過ごし、醬豆（記事の解読困難）一皿で二時間を過ごし大学や大学院に別れを告げて食堂に行く」とある。そして、「懐ろの工合によりキネマ、マージャン、ビリヤード、へ進出する。これがこの種類の学生の日課であり科目である」。国立、公立、私立の高等教育機関や、中等教育機関への進学者数が増加した1930年（昭和5年）頃、学生街として栄えた「盛り場」での「学生」の娯楽として、「喫茶店」や「カフェー」が日常的に利用されていたことが分かる。

でま圓百二らか圓五月 活々生學大の頃近

質氣生奮新るあてまりきらカンピ
査調い白面の部濟共大帝

最近の大学生活は、東京に於ける大學生生活が如く、活々としたものである。大學生生活は、大體大學生生活の中心を占めて居る。大學生生活の中心は、大體大學生生活の中心を占めて居る。大學生生活の中心は、大體大學生生活の中心を占めて居る。

一 飲食面、大體大學生生活の中心を占めて居る。大學生生活の中心は、大體大學生生活の中心を占めて居る。大學生生活の中心は、大體大學生生活の中心を占めて居る。

二 娯楽面、大體大學生生活の中心を占めて居る。大學生生活の中心は、大體大學生生活の中心を占めて居る。大學生生活の中心は、大體大學生生活の中心を占めて居る。

三 服装面、大體大學生生活の中心を占めて居る。大學生生活の中心は、大體大學生生活の中心を占めて居る。大學生生活の中心は、大體大學生生活の中心を占めて居る。



出典：東京朝日新聞「學生昨今」1930年10月25日 東京 朝刊

出典：東京朝日新聞「月五円から二百円まで 近頃の大学生生活」1926年2月14日 東京 朝刊25)

図8 昭和初期の学生の支出と娯楽

図9 「カフェ」と「モダン学生」

表3 1925年(大正14年)時の帝国大学の学生調査

	全学生数 6252名 回答総数 2302票								
	自宅通学	下宿屋	素人下宿	寄宿舎	親戚から	知人宅から	間借	貸家	不明
人数	607	446	425	274	196	132	123	71	28
学資金/月 (家賃・研究費・書物代・小遣いを含む)	5~100円	33~200円	44~150円	25~150円	10~110円	10~120円	25~110円	45~210円	
平均	31円43銭	74円85銭	70円90銭	52円85銭	47円73銭	52円88銭	64円12銭	81円22銭	
	法科	文科	経済	工科	理科	医科	農科		
内訳 (研究費)	11円12銭	15円14銭	10円96銭	11円30銭	15円19銭	11円51銭	11円84銭		

出典：東京朝日新聞「月五円から二百円まで 近頃の大学生生活」1926年2月14日 東京 朝刊より作成

3-3 「学生」の「カフェー」利用による「学生狩り」

大正末期から昭和にかけて、「学生」の「カフェー」への出入りが問題視されるようになる。そして、「学生」にとっての「健全な娯楽」が喚起されるようになり、「カフェー」や「喫茶店」を利用する「学生」は「不良」という扱いになる（図10）。

「カフェー」が「不良学生」の集まる場として『東京朝日新聞』で初めて扱われた記事は、1925年（大正14年）4月29日であった。記事によれば、当時「カフェー」は既に「学生」の多い、神田、本郷、牛込、芝などに多く、また「学生目的のカフェーが全市に網を張」ったように存在していたようだ²⁷⁾。そして、「カフェー」の「ほとんどは皆学生が一番の顧客で某大学の付近のカフェーは驚くべし少なくとも一日五六百人の学生が出入りしてゐる」という。また、記事には「青年学生とカフェー、それは火にそぐ油だ、簡易な酒と女の提供

所であるカフェーは、犯罪学生になくはならぬゆゑ一の要件化してつた」とあり、「不良学生」の溜まり場という扱いになっている。これにより、「カフェー」が取り締まりの対象になり、警視庁保安部は神田、牛込、本郷、芝、麻布に点在していた2000軒余りの「カフェー」で「学生」や労働者の未成年が飲酒し傷害事件を発生していたことから、各署に厳命を通達した²⁸⁾。しかし、その新聞記事は2面に小さく取り扱われている程度で、記事内に「嚴重取締」と記載されているほど、「嚴重さ」があったとは言い難い。

だが、「カフェー」や「バー」での未成年の飲酒や喫煙、傷害事件は後をたたず、「酒の害ばかりか青少年に法律軽視の念をさへ植付てゐるからこの際徹底的に取締られたい²⁹⁾」と1930年（昭和5年）に「カフェー取締令」が發布され、「学生」は規制・取締りの対象になっていく³⁰⁾。そして、1933年（昭和8年）には「特殊飲食店取締規則」ができ、1934年（昭和9年）には未成年者および学生の「カフェー」や「バー」、そして「ダンスホール」の出入り



出典：東京朝日新聞「東京新夜曲」1933年9月18日 東京 朝刊

図10 学生と喫茶店

が禁止となったが、あくまでも「学生服着用による出入り禁止」という処置にとどまった³¹⁾。また、「女給が酔客相手に風紀をみだしている」として、女給の飲酒に「禁酒令」を発令するかどうかという協議がなされるほどで、「学生」の対応以上に女給を勤める女性への処置やまなごしは厳しかった³²⁾。相次ぐ取締りや規制により、「カフェー」の経営は深刻化し、警視庁へ陳情が相次ぎ、大学生の出入り禁止の撤廃を求めるといった事態になった³³⁾。1925年（大正14年）から見受けられた、「学生」の「喫茶店」および「カフェー」利用の取締りは、1938年（昭和13年）をピークに鎮静化する。しかし、その後、戦時下体制により「カフェー」や「喫茶店」の営業時間の規制、「学生」の長髪禁止に限らず、公私における国民の生活様式が細かく規定されることとなる³⁴⁾。度重なる、過度な警視庁による「学生」の「カフェー」への規制は、戦時下における「ぜいたくは敵だ！」という国民精神総動員運動（1937年）の前兆を彷彿とさせる。

その解釈の上で、当時「学生狩り（“サボ学生狩り”とも言った）」という「カフェー」を利用する「学生」の検挙を推し進めていた警視庁安倍総監に、「大学生の人格尊重」を要求するという形で対抗した大学生たちは革新的だったと言えよう³⁵⁾。

4. 昭和初期の「学生」の日記からみる「喫茶店」の利用

これまで論述してきた、「喫茶店」および「カフェー」の概要と、高等教育機関に在学する「学生」の状況を踏まえた上で、1932年（昭和7年）から1934年（昭和9年）に、東洋商業学校の第二本科（夜間部）といった専門学校一戦前においては大学と同じく高等教育機関であった一に通学していた青年学生（以下、記録者）の私物の日記帳（図11）における、「喫茶店」および「カフェー」の記述をもとに利用の実態について論述する。日記帳は、1932年（昭和7年）から1935年（昭和10年）までの4冊があるが³⁶⁾、本稿では「学生」時代に注目すべく、1932年（昭和7年）から1934年（昭和9年）までの3冊を対象とする。



図11 1932～1935年（昭和7～10年）の日記帳

なお、日記帳内の記述を分析するにあたり、記録者自身の生活状況や嗜好を紹介するため、記録者のフェイス項目、学校生活およびアルバイトについては、先行研究である大森（前掲）³⁷⁾の記述を主に参考とする。

4-1 日記とはなにか

アンディ（2011）によれば、日記とは「定期的、個人的、同時代的な記録文書（p.3）」と定義している。定期性とは、記事が固定した時間間隔で記述されているか、特定の出来事に結びついていることである。個人性とは、記事が特定の個人によって作成されていることである。そして、同時代性とは、記事に記述される出来事や活動が、発生時より近い時点で、回想的に起因し、記録が歪められることを最小限にとどめていることである。また、記録物とは、記事はある人物にとっての重要性事項や関連事項を記録しているもので、通常、記録は時間に沿って書かれた文書の形をとっているが、現代においては文書とは限らず、音声、動画、静止画等、多岐に渡る記録が可能となっている（アンディ前掲）。

それら、日記における定義を踏まえて、本資料（図 11）を考察すると下記のようにまとめられる。

定期性：当用日記といった1日の事柄を1ページに記録する日記を使用し、ほぼ毎日、4年間記録されている。

個人性：1930年代に東洋商業学校の第二本科に通学していた記録者による記述である。

同時代性：ほぼ毎日回想的に、日々のできごとを綴っている。

記録物：毎年異なる出版社の日記帳（1932年三省堂、1933年と1935年博文館、1934年積善館）を使用していたが、紙媒体の日記帳を利用している。

4-2 記録者のフェイス項目および東洋商業学校と学生生活

記録者は、1915年（大正4年）生まれの男性である。日記記録時は、祖母と板橋区で同居しており、同居以前は山梨県の実家で暮らしていた。職業は、日記が記録されている1932年（昭和7年）から1934年（昭和9年）3月までは東洋商業学校第二本科（夜間部）に通う「学生」で、その後、山一証券株式会社に入社している。

家族構成は、祖母（母方）と母と妹の三人で、日記記録時は前述の通り、祖母と同居をし、母と妹は山梨で蚕を育成して生活の足しにしていることが日記から読み取れる。父親は1932年（昭和7年）の時点で逝去している。祖父母両親きょうだい以外の親戚は、板橋の家の付近に叔父と叔母が住み、頻繁に交流があったことが示されている。また、叔父、叔母の家には従兄らしき人物が複数人登場している。

記録者が通っていた東洋商業学校は現在の東洋高等学校のことであるが、戦後の1947年

(昭和 22 年)に改称し高等学校になった。戦前までは、東洋商業学校は実業学校として高等教育機関に属した。前進の東洋商業専門学校は 1904 年(明治 37 年)に創立され、翌々年の 1906 年(明治 39 年)に東洋商業学校となった³⁸⁾。記録者は、1930 年(昭和 5 年)に東洋商業学校第二本科の第 1 期生として入学し、1934 年(昭和 9 年)の 3 月に卒業した。

学校のカリキュラムは月曜から土曜日までであり、月曜から金曜までは一日に 4 時間、土曜日が 3 時間となっていた。すべての時間割を記録からは知ることは出来なかったが、日記帳内の記述から「簿記」や「珠算」などの商業科目が多く、それに加えて英語科目がほぼ毎日あった。しかし、記録者は必ずしも授業に出席していたわけではなく、学校を休んで、映画やビリヤードに度々興じていた。

アルバイトは、1914 年(大正 3 年)に発足された「如水会館」という場で、給仕を行っていたことが記録されている³⁹⁾。昼間は如水会館で勤務し、夕方から徒歩で学校に向かい授業に出席していた。

4-3 日記内における社会的出来事の記述

大森(前掲)は、記録者が日記帳内に記述した、社会的できごとの有無を調べることで、記録者が具体的にどんな社会的出来事に関心をもち、あるいは持たなかったのかということから、記録者自身の志向性および生活観が把握できると検証した(表 4, 表 5)。

大森(前掲)は、検証の結果、社会的な出来事の多さに反して、日記帳内にはその社会的な出来事に関する記述が少ないことを指摘し、「記録者が政治関係の出来事や経済関係の大きな動き等はあまり関心が無かったように見受けられる(p.16)」と示した。特に、大森(前掲)が指摘するように、記録者は主に新聞の社会面に掲載される事件やオリンピック、皇太子の誕生についての記述はみられるが、それ以外の出来事には関心を示さなかったことが伺える。その上で、大森(前掲)は、記録者について社会的に関心は払いつつも、事件よりも、イベント要素が多く、可視化された社会的なブームや流行になるような現象に注目していた傾向にあること述べた。

4-4 日記内における「喫茶店」と「カフェー」および「女給」の記述

記録者が「学生」であった 1932 年(昭和 7 年)から 1934 年(昭和 9 年)3 月までの日記帳内における、「喫茶店」と「カフェー」および「女給」等に関連する記述は、17 日分と非常に少なかった。また、実際に「喫茶店」や「カフェー」に赴いた回数は、その 17 日分の 4 日分と極めて少なく、「友人に誘われて」利用するのみであった(表 6)。

1932 年(昭和 7 年)の日記記録時、記録者は 17 歳という未成年であった。前述したように、1930 年(昭和 5 年)から「カフェー取締令」が発令され、学生の「カフェー」利用が取締りの対象となり始める。しかし、日記帳内の記録を見る限りでは、「喫茶店」と称され

表4 社会的な出来事と日記帳内の記述の有無（1932・1933年）

	世の中の出来事	日記に記載してある出来事
1932年	1月8日 桜田門外不敬事件	○
	1月28日 上海事変	○
	2月9日 血盟団事件	×
	2月20日 第18回衆議院選挙	○
	2月29日 リットン調査団来日	×
	3月1日 満州国建国宣言	×
	3月5日 血盟団事件	×
	3月18日 国防婦人会発足	×
	5月5日 上海停戦協定成立	×
	5月15日 5・15事件	○
	5月26日 斎藤実内閣成立	×
	7月24日 社会大衆党結成	×
	7月30日 第10回ロサンゼルスオリンピックが開幕	○○
	9月15日 日本政府が満州国を承認	×
10月2日 リットン報告書を公表	×	
12月16日 白木屋で火災	○	
1933年	1月30日 ヒトラー首相に就任	×
	2月23日 日満軍、熱河作戦により熱河省に侵攻	×
	2月24日 国際連盟、日本軍の満州撤退を盛り込んだ対日勧告案を採択	○
	3月3日 三陸地方、大地震と大津波	×
	3月23日 ドイツ、国会で全権委任法可決	×
	5月18日 大製紙トラスト王子製紙誕生	×
	5月25日 滝川事件	×
	5月31日 塘沽停戦協定成立	×
	6月7日 共産党幹部佐野学・鍋山貞親、獄中で転向声明	×
	7月10日 神兵隊事件	×
	8月9日 第1回関東地方防空演習	×
	10月14日 ドイツ、国際連盟から脱退	×
	11月17日 米、ソ連を承認	×
	12月23日 皇太子明仁誕生	○○

出典：大森（前掲）p.13

※○は記載有を意味し、数は回答（日数）を意味する。×は記載無し。

表5 社会的な出来事と日記帳内の記述の有無（1934・1935年）

	世の中の出来事	日記に記載してある出来事
1934年	1月8日 京都駅構内で将棋倒しの事故	×
	1月29日 日本製鉄会社設立	×
	3月1日 満州国肯定の帝政を実施	×
	3月21日 函館市で大火	×
	4月18日 帝人事件	×
	5月30日 元帥東郷平八郎死去	○○
	7月3日 斎藤内閣総辞職	×
	7月8日 岡田啓介内閣成立	×
	9月21日 室戸台風	○
	10月1日 陸軍省、「国防の本義とその強化の提唱」パンフレット配布	×
	12月1日 丹那トンネル開通	×
	12月26日 東京野球倶楽部誕生(巨人軍)	×
	12月29日 ワシントン海軍軍縮条約の破棄を米国に通告	×
	1935年	2月18日 菊池武夫、美濃部達吉の天皇機関説を団体に反すると攻撃
4月6日 満州国皇帝溥儀来日		○○○○
6月10日 梅津・何応欽協定成立		×
7月25日 コミンテルン第7回大会開催		×
8月1日 中国共産党、抗日救国統一戦線を宣言		×
8月12日 陸軍永田鉄山少将、刺殺される		×
9月18日 美濃部達吉、貴族院を辞任		×
10月1日 第4回国勢調査実施		○
10月3日 イタリヤ、エチオピア侵入開始(エチオピア戦争)		○
12月1日 初の年賀郵便使用切手発行		×
12月8日 大本教の幹部検挙	×	

出典：大森（前掲）p.17

※○は記載有を意味し、数は回答（日数）を意味する。×は記載無し。

表6 1932～1934年(昭和7～9年)の学生の日記における「喫茶店」・「カフェ」・「女給」に関する記述

	いつ (日付)	どこへ (場所)	だれと (同行者)	なぜ (経緯)	なにを (行為・飲食物)	どのような (状況)	コメント	
1932年 (昭和7年)	○	7/2	喫茶店 「白バラ」	O君、F君、S君			洋装の若い女と和服のと合計三人	初めて行く、何と言ってもはじめてなのでこわいような気がしたが入ってみると大したことはなかった。洋装小さい方は十七ぐらいだろう。一寸きれいな顔をしていた。懐れないためかちっとも面白くなかった。帰りに電車の中でO君が「君はあんまりかたくなりすぎるよ」と言われる。
	×	7/11	喫茶店 「白バラ」					F君やO君が喫茶店に行ったのでずいぶん寂しい。
	○	7/15	喫茶店 「白バラ」	T君やH君など計7人	試験終わりで今日は一時間早く上がったから	一時間ほど遊んで帰った	この前洋装だった十七ぐらいの女が一人きりだった	
	○	7/16	喫茶店 「白バラ」	「またみんな」	学校帰りに立ち寄った			一人で帰るのも寂しいのでU君と一緒に帰った。
	×	8/22	カフェー銀座会館 カフェータイガーなど		銀座を見物するため	夜店を見ながら三越へ行ってみつ豆を食べた	一流カフェが立ちならんでいる通り	銀座に初めて行った。新宿にはかなわないが町はさすがにきれいだった。
	○	9/19	新宿のカフェー街の はずれ、帝都座のすぐ隣にある喫茶ウィーン	O君、F君、T君	S君がO君たちが「例の所(喫茶店)」にいるので君も行かないかと誘われる			僕はまだ初めてだがO君やF君はもうかなりのなじみで女給などと盛んに親しげな言葉を交わってかなりはばをきかしている。
	×	9/20					学校へ来てみるといつも早いO君とF君たちが来ていない	さては昨日喫茶ウィーンの女に活動へ連れて行ってくれと盛んに責められたので三人とも行ったのかもしれない。うまくやってやがらあ。水道橋駅へ来てみると案の如く昨日の三人とウィーンの16・7の女と他に見知らぬ学生二人で僕たちの帰りを待っていた。
	×	9/21						O君たちは昨日のウィーンの女と遊びに行ったのをかなり得意げに色々なことを一時間話してくれた。明治神宮に行った時に彼の女の要説を入れてキスしてやったとか、僕に向かっている女は君をとってもしがいていたぜ「ぜいもう一度つれて来て」だとさつまんざらうそでもないらしく言うので悪い気はしなかった。
	×	9/22						奴等はまたウィーンへ行ったらと見えてみんな授業時に消えていた。
	×	9/28						O君F君たちはまたさぼってウィーンへ行く。
1933年 (昭和8年)	×	2/3						O君が新しく来たゲーム取りの女とまじりに話していた。その女はしみりとした言動で「性」に関する話をしていた。「男は女を見るたびにばかにしたり下等に見たり無教育なものである。カフェーの女給だの私遣のようなゲーム取などはまた特別ね。いくら女だつて一個人の人間であるものね。女だつてとてもすごいものわよ」というようなことを盛んに論じていた。
	×	3/4	新宿「喫茶メトロ」	S君、O2君	新宿でたまたま会ったS君とO2君に「君も行かないか」と誘われたため	初めてビールなどを飲んだ	甲州街道を左へ下りて行って新歌舞伎の横の小路を入って行った。そこはカフェー街で両側は喫茶店やカフェーでいっぱいであらからもちろから音響機のジャズなどの音がながれて来てとてもにぎやかだった。	出迎えに出た女を見るとそれは前に行った「喫茶ウィーン」に居たHちゃんという女だった。ウィーンに居た時よりなんだかずつと美しくなっていた。
	×	5/14						映画「島の娘」の主演者坪内美子は最近松竹で銀座のカフェーなどから拾い上げた新女優だ。目は一重だだが口が小さく顔の輪郭もよく調っていきかなりの美人だった。
	○	7/31	九段下東栄堂喫茶部	F2君、I君	別れのしるしとしてF君におごってもらった			F君が同じバイト先から退職する日。クラブ室の会員のKさんから二円札をもらう。
	○	10/31	東京駅八重洲ビル地下の食堂錦水	I君、Y君、H3君	学校をさぼって東京駅から銀ブラ	コーヒー		
1934年 (昭和9年)	○	2/3	映画館の近くの喫茶店	T2君、S君、Y2君	『ムーランルージュ』を友達と観て終わったのが午後10時10分前だったから、近くの喫茶店に寄った			学校へ行ったのは一時間目の終わりで、三時間目にまたさぼって友達と映画を観に行く。家に着いたのは午後11時過ぎだった。

※1. ○は実際に店舗に赴いた日を意味し、×は店舗に赴くことはないものの日記内に関連語の言及があったことを意味する。

※2. 記録者の友人として登場する人物は全て名前の頭文字をアルファベットにした。ゆえにアルファベットが重複する場合は、アルファベットの後に区別のためアラビア数字を加えた。

喫茶店の大衆化過程における学生の利用状況——昭和初期の学生に関する記述を手掛かりに——

ているものの「カフェー」のような「風俗的な」営業が、「喫茶店」で働く女給によって行われている。営業外の交遊や、キスなどといった、新聞記事では見えてこない実態があり、当時における「喫茶店」と「カフェー」の境界がいかに曖昧であったかが見て取れる。

また、記録者は頻繁に「喫茶店」を利用しないものの、記録者の友人であるO君やF君などは、女給が店舗を変えて働いている先に、授業をさぼってまで赴くほどのヘビーユーザーであったことが記録から分かる。そして、規制や取締りの対象になっていることは、記録内からは伺えず、「未成年者だから」と利用を控えている様子もない。

数少ない、「喫茶店」、「カフェー」、「女給」などの関連語の登場頻度からみると、低学年の頃は興味があるものの、高学年になるに連れ、記述そのものがなくなる。その一方で、「九段下東栄堂喫茶部」や「八重洲ビルの食堂錦水」、そして「映画館近くの喫茶店」で、女性に関する記述が全く見受けられない「喫茶店」の利用が目立ち、コーヒーを引用する場が増加している状況と、「喫茶店」形態の多様化が伺える。

5. おわりに

今日の「コーヒー」の飲用や「喫茶店」の大衆化は、戦後によるものであるが、大衆化に至るまでの誕生から黎明期における「喫茶店（カフェ、カフェーを含む）」の利用状況には、高等教育機関の「学生」の存在があった。「文明の飲みもの」をいち早く取り入れた「学生」は、日本初の「喫茶店」とされている「可否茶館」時の利用から、全国的に普及する先駆けとなった日本初の「カフェ」の「カフェーパウリスタ」の利用にも存在していた。「エリート学生」の利用として「インテリ層」に属し、「喫茶店」の黎明期に重要な一客層として「喫茶店」を利用する「学生」は、大正末期から昭和初期に掛けて、「不良学生」の代名詞としての扱いを受けるに至る。

戦前の高等教育機関に在籍する数少ない「学生」に対し、今日の我々においては「エリート学生」という認識が強く、戦時下体制の中日常生活や娯楽が厳格化された頃であったため、「お国のため」といった「禁欲的で忠心的な学生像」が連想される。だが、しかし、昭和初期の「学生」は「サボ学生」や「不良学生」と呼ばれ、ビリヤードや麻雀、そして「喫茶店」や「カフェー」などの娯楽に興じる、「社会的に非難され取締られる存在」であった。だがその上で、「喫茶店」の大衆化過程における「学生」の利用は、コーヒーをいち早く日常的な娯楽の嗜好品として「文化の飲みもの」に取り入れたのみに限らず、「学生文化の飲みもの」とし、「喫茶店」という場が「大学生の人格尊重」を訴える場になった。したがって、昭和初期における「喫茶店」という場は、単なる娯楽施設や嗜好品を楽しむ場、あるいは「風俗的な」娯楽を楽しむ場ではなく、「学生文化」の象徴となっていたと言えよう。

注

- 1) 日本における茶の導入は二度ある。一度目は、比叡山山門守護・山王神社の『山王人道秘密記』に「茶の実は大唐より大師求め持ちたまい、御帰朝有、ここに植え、その後、山城国宇治郡所々に植め給い」という記述があり、805年に天台宗の最澄が唐から種子を持ち帰ったことであり、これが日本の茶の始まりとされている。二度目は、12世紀末に栄西が中国江南地方の緑茶の種子を持ち帰ったことである。栄西が持ち帰った種子を筑前の背振山に植え、各寺に贈ったことが全国に広まるきっかけとなった（江原ら前掲）。
- 2) 石毛（前掲）によれば、茶は導入時、中国文明から伝播した「文明の飲みもの」であったが、歴史の経過の中で変容し、飲み物の作り方、飲み方が日本化することによって「文化の飲みもの」になったと述べている。なお、石毛（前掲）は図1で示した茶と酒の対立において、コーヒー、紅茶、清涼飲料水、ジュース、牛乳の外来のソフトドリンク類は、「伝統的観念との関係が希薄である（p.189）」と述べ、この茶と酒における伝統的対立とは無関係なカテゴリーの飲み物に位置づけられると分析している。
- 3) コーヒーが本格的に、日本全国の大衆にとって日常的習慣飲料となるのは、第二次大戦後だとされている。1950年（昭和25年）にコーヒー豆の輸入が再開され、1960年（昭和30年）に生豆の完全自由化がなされる。そして、1961年（昭和31年）にインスタント・コーヒーの完全自由化となり、インスタント・コーヒーブームが発生する（社団法人全日本コーヒー協会「コーヒー歴史年表」<http://coffee.ajca.or.jp/webmagazine/library/history3-2> 閲覧日時：2015年7月12日）。一方、『読売新聞』では獅子文六により『コーヒーと恋愛（可否道）』が1962～1963年に連載される。高田（前掲）は、1960年頃の週刊誌に「喫茶店のラッシュアワー」「有史以来のコーヒーの飲み量です」などの記述が多いことを指摘し、コーヒーの消費量が毎年1000トンずつ増加していることや、喫茶店の数が全国で10万軒に近づいていることを指摘している。
- 4) 「一服一銭」とは、室町時代に寺の門前や路傍で、僧侶が参拝客に煎茶一服を銭1文で飲ませたことを指す。
- 5) 石毛（前掲）によれば、紅茶とコーヒーは明治の「文明開化」により「公」から始まった。「ホテルや西洋料理店といった社会の側の施設から」始まり、「軍隊の制服、官吏の衣服に始まる「洋服」、兵営、学校、役所、会社、ホテルの建築物としての「洋館」、外国人との会食や公的宴会の食事、兵食に始まる「洋食」がその例である（石毛前掲 p.196)」。そして石毛（前掲）は、「洋食を食べさせる外食施設での飲みものとして、紅茶、コーヒーが供されたのであるが、それを味わったことのある人々はほんの少数であった（p.196）」と述べている。
- 6) 鄭永慶は、代々、長崎の唐通詞を務めた日本人の家系である。京都仏学校を経て、渡米し、エール大学で学び帰国後、外務省で勤務していた、いわゆる当時の「インテリ層」であった（高井前掲）。
- 7) 「可否茶館」よりも前に、画家であり写真師でもあった下岡蓮杖が浅草奥山に「油絵茶屋」を開業しているようである（林2002）。しかし、前述したように江戸末期から明治期にかけて西洋料理店やコーヒーを提供する場は各地に存在しており、どの店が「日本で最初」と呼べるかは困難を極めている。
- 8) 記事本文の解説にあたっては、下記のURLに掲載されていた文章を参考にし、加筆した。くろしお出版のサイトによれば「用字を現代風に改め、〔 〕内を補って引用」している。ま

た、記事内の「当館の可否品評し給へかしと館主に代りて鶯里の思案外史敬で白す〔申す〕」という文章から、くろしお出版ではこの開業広告が「小説家の石橋思案（「外史」は号）の筆であることが分かる」と記している。

株式会社くろしお出版 admin3「くろしお出版 WEB-ニュース」<http://www.9640.jp/xoops/modules/news/article.php?storyid=167>（閲覧日時：2015年6月8日）

- 9) コーヒー・ハウスとは、17世紀半ばのイギリスに誕生した社交の場である。単にコーヒーを楽しむ場ではなく、身分、職業、上下貴族の区別なく誰でも入店することができ、政治問題などを自由に議論し合うなど、近代ジャーナリズムを育んだ場所であった。また、コーヒー・ハウスには、官報や新聞、雑誌が置かれ、それらを読む人や、読んで聞かせる人たちもいた。これらの状況から、コーヒー・ハウスの役割は、ヨーロッパの出版文化においてきわめて重要であった。しかし、注目すべきは、「誰でも入店可能」であったが、あくまでも「時間的にある程度余裕のある人間たち」、つまり、主に上層階級と中産階級が利用していた場であった。
小林章夫（2000）『コーヒー・ハウス』講談社
- 10) 当時の『読売新聞』によれば、国政医学会の講義と討議、理財協会による「日本銀行の外国為替問題」の討論会、帝国大学医科撰科学生の茶話会、帝国医科撰科学生の医学研究会の開催地として利用されていたことが分かる。
読売新聞「国政医学会」1889年5月24日 朝刊
読売新聞「理財協会」1889年10月2日 朝刊
読売新聞「茶話会」1889年11月27日 朝刊
読売新聞「医学研究会」1890年1月31日 朝刊
- 11) 高橋大華翁の語りは、以下の内容である。「この店は、我々学生は『コーヒー茶館』といていた。御成道から少し奥まった所に門があり、門を入るとすぐに玉突きがあり、我々をよく、何ものまずに玉だけついて戻ることもあった。二階が喫茶室でテーブルに丸のも四角のもあり、椅子は普通の籐イスであった。壁には壁紙がはられ、天井には吊りランプがあった。女給といっても普通の少女がいた。一杯一錢五厘のコーヒーは、当時の物価としては（米一升三錢五厘）、そばが一杯八厘で種ものが三錢の時代だから、我々の常識として『一杯の西洋茶』が『二杯のそば代』と同価であるので安いという気はしなかった。洋酒もビールもあり、日本酒も出した。一品料理、パン、カステラなども出た。当時、可否茶館に行くといえはハイカラのほうであった（後略）（伊藤前掲、pp.202-203）。
- 12) 斎藤（2011）によれば、1911年（明治44年）よりも前に「喫茶店」は普及していたという見解もある。というのも、斎藤（前掲）によれば店名に「喫茶（店）」や「カフェー」ということばを用いずとも、「日本座敷」、「洋食堂」、「玉突場」、「浴場」、「和洋料理」、「喫茶」、「寿司」、「しるこ」などを提供する「飲食遊行商業空間」は「喫茶店」としてではなく「料理屋」として存在していたという。つまり、斎藤（前掲）の見解は、『東京市統計年表』上の「喫茶店」の店舗数は少なく、普及していないかのようなのであるが、1900年代には既に「喫茶店」としてみなされていない店舗が多く存在していたに過ぎず普及していたということである。
- 13) 1908年（明治41年）に水野龍が手掛けた皇国殖産株式会社が、日本で最初のブラジル移民を神戸港からサントス港へ向けて出港させた。以後、多くの日本人がブラジルに渡ることとなった。水野はこの功績により、ブラジル政府からコーヒー豆を毎年1000俵、3年間無償で提供されることになった。「カフェーパウリスタ」は、1923年（大正12年）の関東大震災で一度

崩壊して以降店舗展開を縮小させているが、東京都中央区銀座にて現在も営業している。戦時中に「カフェパウリスタ」から「日東珈琲株式会社」と改名し、現在は、各種珈琲、紅茶、ココア、ミルク、ジュース、砂糖、ケーキ、冷凍食品等食料品の輸入、製造、販売ならびに喫茶関係機械器具の販売を行っているが、1911年（明治44年）の銀座移転開業時から既に小売りと卸業の多角経営を行っていた。

長谷川（前掲）、日東珈琲株式会社「会社案内 | 銀座カフェパウリスタ」<https://www.paulista.co.jp/company/index.html>（閲覧日時：2015年6月9日）

- 14) 注(12)に前述したように、斎藤（前掲）によれば、『東京市統計年表』上の「喫茶店」の数値を理解するにあたって、三つの考察点があるという。第一に、1898年（明治31年）から1922年（大正11年）までのデータには「カフェ」などが「喫茶店」として含まれていないということ。第二に、1898年（明治31年）から1907年（明治40年）までの「喫茶店」の店舗数は60~70店で安定しているが、「これは公園や遊楽地での茶屋のものが、定常的であったことを意味」するということで、1908年（明治41年）から1922年（大正11年）に漸減傾向にあるのはこれらの施設数が減ったに過ぎず「喫茶店（カフェを含む）」の店舗数全体が減ったわけではないということ。そして第三に、1929年（昭和4年）以降は「カフェ」の店舗数が反映され、カフェの増殖に対応していると指摘している。
- 15) ちなみに、2014年のコーヒー生豆換算合計（生豆のみでなく、脱カフェインものや、いったもの、インスタント、そしてコーヒーエキスを含んだ数値）輸入量は、45万9708トンである。一般社団法人全日本コーヒー協会「統計資料 | 全日本コーヒー協会」<http://coffee.ajca.or.jp/data>（閲覧日時：2015年6月9日）
- 16) 「ミルクホール」とは、温かい牛乳を提供する「喫茶店」のことである。既に明治の頃から誕生しており、大正期に栄えた。メニューには牛乳のほかに、トースト、ケーキ、蜜柑などがあり、通常の「喫茶店」よりも値段が安かった。また、コーヒーの提供もあり、牛乳にコーヒーを加える「ミルク・コーヒー」も飲まれた。そして、新聞や雑誌、官報などが無料で読めた。そのため、神田、牛込、本郷、三田などの学生街に多く存在していた（林前掲、高井2009前掲）。
- 17) この文脈における「カフェ」は、「飲食を提供しつつウエートレス（当時の女給）のサービスを売りにする店（高井2009, p.106）」のことを指す。「女給は、現在のキャバクラ嬢や、バーやキャバレーのホステスの役割を果たすようになり、「特殊喫茶」として警察の管理下に置かれるようになる（高井2009, p.106）」。
- 18) 林（前掲）によれば、「純喫茶」とは「カフェ」が風俗営業店となることで、純粋にコーヒーを飲む店を区別するために生まれた名称である。
- 19) 日本近代史研究会（1952）『画報近代百年史 第十三集』国際文化情報社、p.1039（ページ数の表記は資料の表記に則る）。資料提供、東京経済大学長谷川倫子教授。
- 20) 「学制」は、全国の教育行政を文部省が管轄することを明示し、全国を8大学区、256中学区、5万3760小学区に分け区ごとに各1校設置する計画を規定した。「学制」では、初等教育の設置に注力し、初等教育の尋常小学校を下等4年（6~9歳）と、上等4年（10~13歳）に二分し、1875年（明治8年）には学校数を約2万4500校設置した。就学率は35.4%であった。国立教育政策研究所「我が国の学校教育制度の歴史について（「学制百年史」等より）」http://www.nier.go.jp/04_kenkyu_annai/pdf/kenkyu_01.pdf（閲覧日時：2015年6月9日）

- 21) 1897年(明治30年)に京都に2校目の帝国大学が設置されるまで、大学という名称の高等教育機関は「東京大学(帝国大学)」以外存在しなかった。
- 22) 明治から1950年(昭和25年)までにおける「高等教育機関」は、旧制大学、旧制専門学校、旧制高等学校、高等商業学校、高等農業学校、高等師範学校であったが、戦後学制改革がなされ新制大学となってからは、大学院と短期大学を含んだ大学と、高等専門学校を指す。
- 23) 竹内(前掲)は明治から昭和における日本の20歳男子数と旧制高等学校卒業生の割合を示し、旧制高等学校卒業生が100人に1人を超えることはなかったということから、旧制高等学校卒業生が「学歴「貴族」にふさわしい「針の穴」をとった稀少な存在」であったことを指摘している。
- 24) 総務省統計局「統計局ホームページ/日本の統計 2015—第2章 人口・世帯」<http://www.stat.go.jp/data/nihon/02.htm> (閲覧日時:2015年6月11日)
- 25) 記事の内容は以下の通りである。

「月五円から二百円まで 近頃の大学生々活 ピンからキリまでである新書生気質 帝大共済部の面白い調査」

郷園をあとに大望を抱いて東都に学んでる大学生連が果たしてどんな生活をしてゐるか数字統計攻めで明るみへ出さうご昨冬帝大友會共済部でやつた同大学学生生活調査は十二月十日から同十九日までの申告総数二千三百〇二票(大学全学生数六千二百五十二名に対して三割七分弱)という意外な好成绩ををさめた、今度の統計調査は申告者が非常に真面目で一見出タラ目と思つたものは一二名しかない、近く公表の予定だが主な貼(解読困難)だけ拾つて見ると

- ▲一番重要な学費(宿料研究費、書物代、小遣等を含む)を見ると(臨時費ぬき月平均)
- ▲自宅より通学者(申告総数二千三百〇二名中六百七名)最低五円、最高五百円(平均にすると三十一円四十三銭)
- ▲下宿屋より(四百四十六名)三十三円から二百円まで(平均七十四円八十五銭)
- ▲素人下宿(四百二十五名)四十円から百五十円(平均七十円九十銭)
- ▲寄宿舎(二百七十四名)二十五円から百円(平均五十二円八十五銭)
- ▲親戚から(百九十六名)十円から百十円(平均四十七円七十三銭)
- ▲知人宅から(百三十二名)十円から百二十円(平均五十二円八十銭)
- ▲間借(百二十三名)二十五円から百十円(平均六十四円十二銭)
- ▲貸家(七十一名)四十五円から二百十円(平均八十一円二十二銭)

前記中借家に最高二百十円といふのはたつた一人で理科の一学生で研究費百五十円といふからまア例外だ、更にその学費の大体の内訳を見ると

- ▲宿料中間代は一畳あたり市内は二円五十一銭市外は二円〇三銭
- ▲賄料市内の下宿屋二食で二十一円五十四銭、三食二十四円四十一銭、市外の方はやゝ低く二食十九円八十銭、三食二十二円五十九銭(素人下宿も似たもの、寄宿舎はさすがに安く三食十八円十四銭)
- ▲研究費には各科の特徴あらはれ法科平均一ヶ月十一円十二銭、文科十五円十四銭、経済十円九十六銭、工科十一円三十銭、理科はさすがに多く十五円十九銭、医科十一円五十一銭、農科十一円八十四銭(最低経済の一円から理科の百五十円)
- ▲小遣では寄宿舎から通学する一人月二円を最低で、借家の百円、下宿屋九十五円を最高とする

▲愛読書には一番各科の傾向が一目瞭然に出てみて各科通じて小説は最高位だが第二位に法科では哲学，文科では文学書，経済では妙に戯曲，工科では雑誌，理科では科学書，医学では宗教哲学，農科では雑誌古典で，一寸意外なのは法科で専門の法学書，社会問題書が第七八位なこと，経済では第十位の経済書より叢談の方が上位なこと，工科で宗教書が第四居なこと，理科で旅行記の多いこと

その他病気には慢性胃腸痛が総申告数中一割以上を占めること 娯楽には各科通じて圍棋（解説困難），観劇が一番多いこと，し好は大體煙草，菓子，酒，果物の順序なこと，次男以下を加へて長男の数に及ばぬ程惣額の甚六が優待されてることなどなどに意外な実態があらはれてゐる

東京朝日新聞「月五円から二百円まで 近頃の大学生生活」1926年2月14日 東京 朝刊

26) 伊藤（前掲）によれば，戦前のコーヒーの値段の変遷は，1888年（明治21）1銭5厘，1897年（明治30年）2銭，1907年（明治40年）3銭，1916年（大正5年）5銭，1921年（大正10年）10銭，1926～30年（昭和1～5年）10銭，1934～40年（昭和9～15年）15銭，そして1945年（昭和20年）が5円であった。戦時下に輸入が規制されることで，1945年には一気に値段が上がる。

27) 東京朝日新聞「カフェーから生まれる近頃の学生犯罪 もっとも安価な酒と女の供給に 今や全く不良団の巢」1925年4月29日 東京 夕刊

東京朝日新聞「女給を中心に恐るべき連絡を 学生街には軒なみのカフェーの内部 最後の三十銭まで紅茶代に」1925年4月29日 東京 夕刊

28) 東京朝日新聞「厳命を發してカフェーの取締 未成年飲酒はどしどしと主人も共に処罰す」1925年5月22日 東京 夕刊

29) 東京朝日新聞「カフェー征伐に排酒学生の運動」1929年8月13日 東京 夕刊

30) しかし，「取締り」といっても，取締りを行っている刑事は「これ等不良に対して警視庁や警察には連行せざむそかに説教し甚だしい者のみに処罰の方針を取つてゐる」という処置で，警察内での「不良係り」という機関では「新方針として国元から学資を受けつゝ遊んでゐる青少年に対しては，親を召喚して引き渡し結局東京から追払ふ方法を取つてゐる」という対応を取つてゐるようであった。

東京朝日新聞「東京悪化させるサボ学生は追放」1929年9月20日 東京 朝刊

31) 東京朝日新聞「学生にカフェー封じ 愈十日から断行 「制服着ぬ客はこの限りに非ず」とこゝに抜け穴あり」1934年10月5日 東京 夕刊

しかし，1930年当時の「喫茶店」や「カフェー」を利用する「モダン学生」は皆，「ほぼ共通した制服（？）を着けて」おり，「帽子は横に七分にかぶる，ズボンは一時は一様に例のセーラーであつたが，最近煙突ズボンというヤツ，それから彼等はいつもポケットから七ツ道具の一つである小鏡とくしを取り出して頭を手入れする」という。ちなみに，当時の「モダン学生」の七ツ道具とは，鏡，くし，顔のあぶらを取る紙，靴ふき，名刺，万年筆，ハンカチであつたようだ。

東京朝日新聞「学生昨今」1930年10月25日 東京 朝刊

32) 東京朝日新聞「新しい御法度女給に禁酒令 一石二鳥・法規を研究」1935年3月20日 東京 夕刊

33) 1935年（昭和10年）の12月，大東京特殊飲食業界組合連合会が取締規則を改正して欲しい

と警視庁に陳情嘆願した。嘆願内容は以下の通りである。

- 一、営業時間を従来の十二時までを延長して、午前二時まで許可して欲しい
- 二、特殊飲食店と普通飲食店の限界区別を明確にして欲しい
- 三、従業婦の店における行動については店主に一切責任を負わさない
- 四、従業婦に手帳を持たすこと
- 五、新営業許可は50メートルの間隔を置くこと

六、学生、生徒の出入り禁止は大学生のみ出入りを許すこと

「カフェー」にとって、いかに学生が重要な客であったかが分かると共に、従業員（女給）の身体的な管理による男尊女卑な社会状況や、当時「カフェー」が氾濫していたことによるライバル店の増加防止の意図がうかがえる。

東京朝日新聞「カフェー悲願」1935年12月13日 東京 夕刊

- 34) 1939年（昭和14年）6月13日に、内閣府情報部で精動委員会の生活刷新に関する小委員会が開催され審議の結果決定されたのが以下の六項目であった。

- 一、月に一回の国民生活日の設定
- 二、料理、待合、カフェー、バー、喫茶店等の営業時間短縮
- 三、一定の階級及び場所の禁酒
- 四、冠婚葬祭の簡易化
- 五、中元、歳暮等の贈答の廃止
- 六、学生生徒の長髪禁止

この審議以降も、ネオンサイン、パーマネントウェーブ、麻雀、映画館の入場制限、早起き、報恩感謝、上下一心、時間厳守、節約貯蓄、心身鍛錬等、国民の道徳心からファッション、娯楽、そして生活習慣までを事細かに抑制した。

東京朝日新聞「営業時間短縮や“国民生活日” 生活刷新の小委員会」1939年6月14日 東京 朝刊

東京朝日新聞「精動全委員が強調 麻雀も廃止せよ パーマネント廃止最後の断」1939年6月25日 東京 朝刊

東京朝日新聞「学生に告ぐ 映画館入場にも制限」1940年8月18日 東京 夕刊

- 35) 警視庁安倍総監は、戦時下ゆえに「国家の為に戦線では兄弟が生命を賭して戦つてゐる時」に「学生」が「喫茶店」や「カフェー」、バー、そしてビリヤードで「遊惰な気分に入っている」のを問題視し、「学生」たちの一括検挙をはかった。しかし、早大生各部連合委員の学生たちは「現下の学生一般は時局認識に燃えてゐる事は確信する」とした上で、「一部の不良学生のために全一萬八千の学徒を玉石混合」に検挙するのは問題だと抗議し、またそのような態度の警察官に人格を侮辱されていると訴えた。その上で、茶店の必要性を説き、「学生狩り」の検挙をやめるように要求したが、その陳情は叶わなかった。

東京朝日新聞「親の身になつて見ろ 安倍総監サボ狩りの肚」1938年6月18日 東京 朝刊

東京朝日新聞「譲らぬ早大生 警視庁も態度強硬」1938年6月21日 東京 朝刊

- 36) これら4冊の日記帳は、東京経済大学の長谷川倫子教授が所沢の古本市で発見したものであり、それを貸して頂いた資料である。資料の解説にあたっては、2015年度の長谷川教授の大学院演習に出席した、張賽帥さん、河西仁さん、李健銘さん、大藤あずささんにご協力頂いた。この場を借りて、長谷川教授、演習の同士の皆様にご感謝を表したい。演習の皆様のご協力がなけ

れば本章を作成することはできなかった。このことに深く感謝する。

- 37) 同じ資料（青年の日記帳）を元に研究を行っている大森（前掲）は、記録者の映画視聴と読書習慣についての余暇行動を研究の主体としているため、「喫茶店」に関する研究は行っていない。その点において、本稿が注目する「学生」の「喫茶店」利用に関する記述は、大森（前掲）と重複しないが、記録者についての分析は有用性が高い。
- 38) 東洋高等学校「東洋高校の歴史 - 学校案内 - 東洋高等学校」<http://www.toyo.ed.jp/guide/guide02.html>（閲覧日時：2015年6月12日）
- 39) 株式会社東京會館「如水会館について | 如水会館」<http://www.kaikan.co.jp/josui/aboutus/>（閲覧日時：2015年6月12日）

引用文献

- 天野郁夫（2009）『大学の誕生（上）』中公論新社
- アンディ・アラシェフスカ著／川浦康至・田中敦訳（2011）『日記とは何か——質的研究への応用』誠信書房
- 石毛直道（1996）「飲み物の100年」, 熊倉功夫・石毛直道編集『日本の食・100年〈のむ〉』ドメス出版
- 伊藤博（2001）『コーヒー博物誌』八坂書房
- 江原絢子・石川尚子・東四柳祥子（2009）『日本食物史』吉川弘文館
- 大森龍太（2011）「昭和初期における東京の若者の余暇—ある人物の日記を事例として—」東京経済大学修士論文
- 加藤秀俊（1981）『一年諸事雑記帳 上』文藝春秋
- 小林章夫（2000）『コーヒー・ハウス』講談社
- 斎藤光（2011）「ジャンル「カフェ」の成立と普及（1）」, 京都精華大学『京都精華大学紀要』第39号
- 坂井素思（2007）「コーヒー消費と日本人の嗜好趣味」, 放送大学『放送大学研究年報』第25号
- 高井尚之（2009）『日本カフェ興亡記』日本経済新聞出版社
- 高井尚之（2014）『カフェと日本人』講談社
- 高田公理（1996）「日本におけるコーヒー飲用の100年」, 熊倉功夫・石毛直道編集『日本の食・100年〈のむ〉』ドメス出版
- 竹内洋（2011）『学歴貴族の栄光と挫折』講談社
- 東京朝日新聞「カフェから生まれる近頃の学生犯罪 もっとも安価な酒と女の供給に 今や全く不良団の巢」1925年4月29日 東京 夕刊
- 東京朝日新聞「女給を中心に恐るべき連絡を 学生街には軒なみのカフェの内部 最後の三十銭まで紅茶代に」1925年4月29日 東京 夕刊
- 東京朝日新聞「厳命を發してカフェの取締 未成年飲酒はどしどしと主人も共に処罰す」1925年5月22日 東京 夕刊
- 東京朝日新聞「月五円から二百円まで 近頃の大学生生活」1926年2月14日 東京 朝刊
- 東京朝日新聞「カフェ征伐に排酒学生の運動」1929年8月13日 東京 夕刊
- 東京朝日新聞「東京悪化させるサボ学生は追放」1929年9月20日 東京 朝刊

喫茶店の大衆化過程における学生の利用状況——昭和初期の学生に関する記述を手掛かりに——

- 東京朝日新聞「学生昨今」1930年10月25日 東京 朝刊
東京朝日新聞「東京新夜曲」1933年9月18日 東京 朝刊
東京朝日新聞「学生にカフェー封じ 愈十日から断行 「制服着ぬ客はこの限りに非ず」ところに
抜け穴あり」1934年10月5日 東京 夕刊
東京朝日新聞「新しい御法度女給に禁酒令 一石二鳥・法規を研究」1935年3月20日 東京 夕
刊
東京朝日新聞「カフェー悲願」1935年12月13日 東京 夕刊
東京朝日新聞「親の身になつて見ろ 安倍総監サボ狩りの肚」1938年6月18日 東京 朝刊
東京朝日新聞「譲らぬ早大生 警視庁も態度強硬」1938年6月21日 東京 朝刊
東京朝日新聞「営業時間短縮や“国民生活日” 生活刷新の小委員会」1939年6月14日 東京 朝
刊
東京朝日新聞「精動全委員が強調 麻雀も廃止せよ パーマネント廃止最後の断」1939年6月25
日 東京 朝刊
日本近代史研究会（1952）『画報近代百年史 第十集』国際文化情報社
日本近代史研究会（1952）『画報近代百年史 第十三集』国際文化情報社
長谷川泰三（2008）『日本で最初の喫茶店「ブラジル移民の父」がはじめた——カフェーパウリス
タ物語』文園社
林哲夫（2002）『喫茶店の時代』編集工房ノア
広瀬幸雄・圓尾修三・星田宏司編集（2007）『コーヒー学入門』人間の科学社
前坊洋（2000）『明治西洋料理起源』岩波書店
読売新聞「可否茶館開業報條」1888年4月13日 朝刊
読売新聞「国政医学会」1889年5月24日 朝刊
読売新聞「理財協会」1889年10月2日 朝刊
読売新聞「茶話会」1889年11月27日 朝刊
読売新聞「医学研究会」1890年1月31日 朝刊
読売新聞「コーヒ店開業 カフェーパウリスタ」1911年12月12日 朝刊

参考 URL

- 一般社団法人全日本コーヒー協会「統計資料 | 全日本コーヒー協会」<http://coffee.ajca.or.jp/data>
（閲覧日時：2015年6月9日）
株式会社くろしお出版 admin3「くろしお出版 WEB - ニュース」[http://www.9640.jp/xoops/
modules/news/article.php?storyid=167](http://www.9640.jp/xoops/modules/news/article.php?storyid=167)（閲覧日時：2015年6月8日）
株式会社東京會館「如水會館について | 如水會館」<http://www.kaikan.co.jp/josui/aboutus/>（閲覧
日時：2015年6月12日）
国立教育政策研究所「我が国の学校教育制度の歴史について（「学制百年史」等より）」[http://
www.nier.go.jp/04_kenkyu_annai/pdf/kenkyu_01.pdf](http://www.nier.go.jp/04_kenkyu_annai/pdf/kenkyu_01.pdf)（閲覧日時：2015年6月9日）
社団法人全日本コーヒー協会「コーヒー歴史年表」[http://coffee.ajca.or.jp/webmagazine/library/
history3-2](http://coffee.ajca.or.jp/webmagazine/library/history3-2)（閲覧日時：2015年7月12日）
東洋高等学校「東洋高校の歴史—一学校案内—東洋高等学校」<http://www.toyo.ed.jp/guide/guide02>

html (閲覧日時: 2015年6月12日)

日東珈琲株式会社「会社案内 | 銀座カフェーパウリスタ」<https://www.paulista.co.jp/company/index.html> (閲覧日時: 2015年6月9日)

総務省統計局「統計局ホームページ / 日本の統計 2015—第2章 人口・世帯」<http://www.stat.go.jp/data/nihon/02.htm> (閲覧日時: 2015年6月11日)

文部科学省「『日本の成長と教育』(昭和37年度) [第2章 2 (5)]」http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad196201/hpad196201_2_014.html#tb1.11 (閲覧日時: 2015年6月10日)